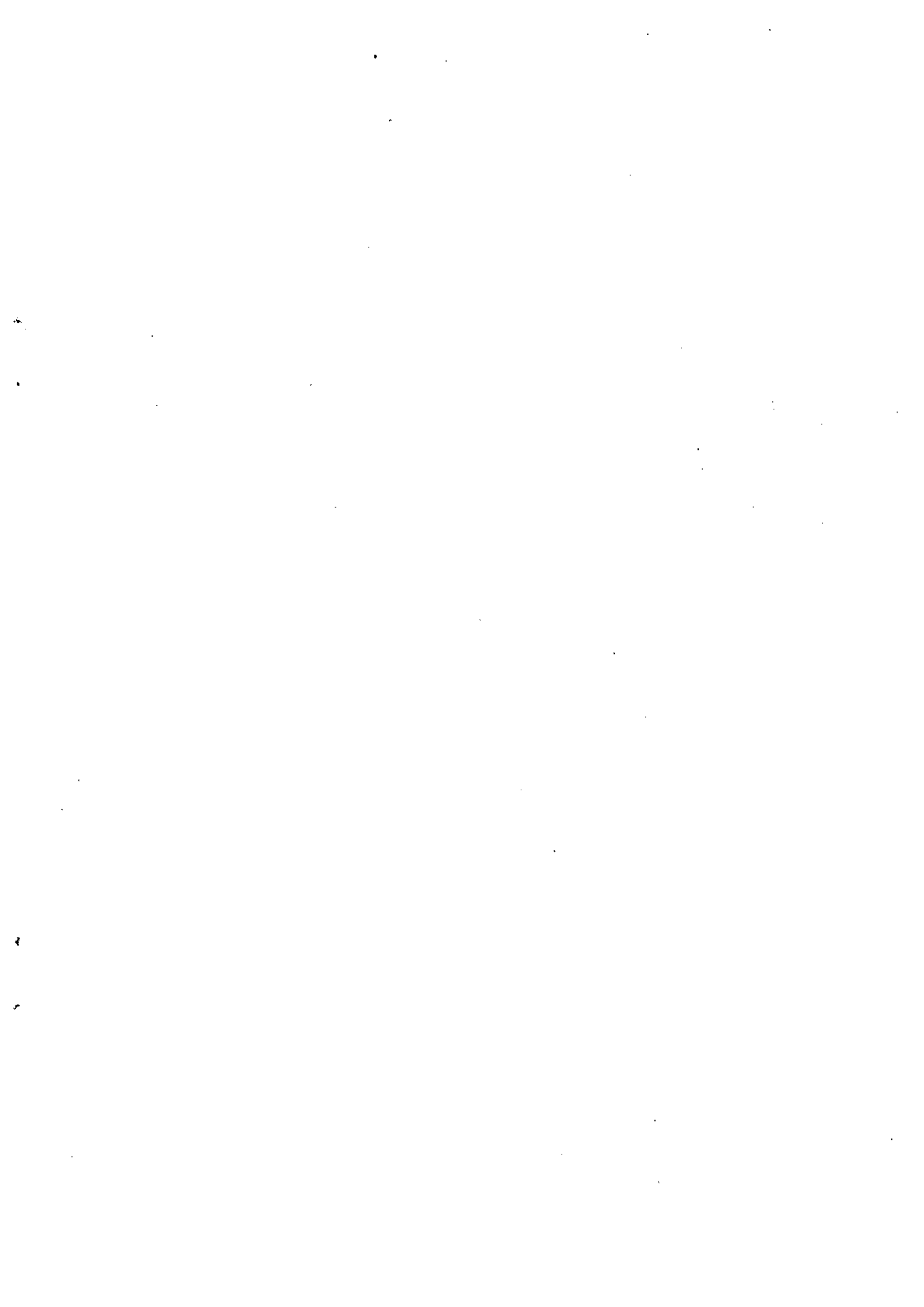


国語問題

(解答番号 1～29)

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は18ページあります。
2. 「数学Ⅲ・数学C」の問題は反対の面にあります。



(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

* ガジェットが大好きなので、新しい電子デバイス*が出るとすぐに買ってしまおう。iPadも発売当日にゲットした。さっそく電子書籍なるものをダウンロードして読書を試みる。電子書籍の出現によって紙の本の命脈が尽きるのではないかという論が巷間に流布しているので、その可否を身を以て吟味してみようというのである。結論はすぐに出た。

紙の本はなくならない。というか、紙の本という確固とした基盤ぬきには
a 電子書籍というものは存立することができないというのが私の結論である。その理由を以下に述べる。

電子書籍の第一の難点は「どこを読んでいるかわからない」ことである。

たしかに頁をめくると「ぱらり」と音がしたり、頁がたわんだり、反対側の活字が透けて見えたりと、紙の本を読んでいる状態を擬似的には経験できる。だが、残り何頁であるかがわからない。いったい自分が物語の中のどの部分を、どの方向に向かって読み進んでいるのかわからない。

自分が全体のどの部分を読んでいるかを鳥瞰的に絶えず点検することは(あまり指摘する人がいないが)読書する場合に必須の作業である。というのは、ある文章が冒頭近くにあるか、中程にあるか、巻末が迫ったところにあるかによって、その文章の解可能性に大きな差異が生じるからである。

例えば、推理小説の場合、「いかにも怪しげな人物」が物語のはじめの方に登場してきた場合には、ある程度小説を読み慣れた読者は「この人は犯人ではなく、
b 「レッドヘリング(読者を誤った推理に導くための偽りの手がかり)」である可能性が

高い」という推論を行う。作者の方は読者をミスリードするために次々と「レッドヘリング」を投じてくる。「残り頁数」はその真贋判定の重要な手がかりである。「残り頁数」がある限度を切ると、そこから後は「読者をミスリードするようなトリック」はもう出てこないからである。そういう「ポイント・オブ・ノー・リターン」が存在する。グラウンドレベルで読み進んでいる自分を「読み始めから読み終わりまでの全行程を上空から鳥瞰している仮想的視座」からスキャンする力がなければ、そもそも読書を享

受するということは不可能なのである。その消息は音楽を聴く場合と変わらない。

音楽というのは、「もう聞こえない音」がまだ聞こえ、「まだ聞こえない音」がもう聞こえるという、時間意識の拡大を要求する。私たちはまるで当たり前のように「旋律」とか「リズム」とかいう言葉を口にしてはいるが、これは「もう聞こえない音」を記憶によつて、「まだ聞こえない音」を先駆的直感によつて、現在に引き寄せることで経験しているから言えることなのである。そして、この音楽的経験は、「もう聞こえない音」「まだ聞こえない音」の範囲が広ければ広いほど深く厚みのあるものになる。現在の前後数秒の音しか再生できないというシヨート・メモリーの聴き手と、数十分の交響楽の最初から今までのすべての楽音を今生で、それを踏まえてこれから後の曲想の展開を予期しうる聴き手では、同一の楽音から引き出すことのできる快樂の質が違ふ。

私はその能力を「マッピング(地図上に自分の位置を記すこと)」と呼ぶのであるが、これは単に読書や音楽鑑賞に止まらず、人間が生きてゆく上で必須の能力なのである。

「おのれ自身を含む風景を鳥瞰する力」。ヘーゲルだったらそれを「自己意識」と呼ぶだろうし、フッサールだったら「超越論的主観性」と呼ぶだろう。別に何と呼んでも構わないが、それは人間が生きる上での不可欠の能力である。そして、読書はその力を涵養するための好個の機会なのである。

私たちは物語を読んでいるときに、つねに「物語を読み終えた未来の私」という仮想的な消失点を想定している。読書とは、「読みつつある私」と、物語を最後まで読み終え、すべての人物のすべての言動の、すべての謎めいた伏線の「ほんとうの意味」を理解した「読み終えた私」との共同作業なのである。紙の本では頁をめくることが、「読みつつある私」と「読み終えた私」の距離が縮まり、それと同時に「読み終えた私」の感じている愉悅が少しずつ先駆的に先取りされる。そして、最後のページの最後の一行を読み終えた瞬間に、ちょうど山の両側からトンネルを掘り進んだ工夫たちが暗黒の一点で出会って、そこに一気に新鮮な空気が流れ込むように、「読みつつある私」は「読み終えた私」と出会う。読書というのは、そのような

電子書籍はこの「読み終えた私」への小刻みな接近感を読者にもたらすことができない。紙の本という二次元的実体を相手にし

ているときには、「物語の終わりの接近」は指先が抑えている残り頁の厚みがしだいに減じてゆくという身体実感によって連続的に告知されている。だが、電子書籍ではそれが²ない。仮に余白に「残り頁数」がデジタル表示されていても、電子書籍読書では、「読み終えた私」という仮想的存在にはパーテイへの招待状が送られていないのである。

第二の難点は、電子書籍では「宿命的な出会い」が起こらないということである。

書店にいと、その題名も著者名も知らない本に、c 引き寄せられるように近づき、それを手に取ったときに「自分が今まさに読みたいと思っていたその本」に出会うということが起こる。題名も著者名も主題も何も知らぬまま「何となく本を手取る」とき、私たちをその本に「惹きつけた力」とは何なのであろう。それがどのような本であるかについての予備知識がないにもかかわらず、その本の私たちにとつての死活的な重要性が先駆的にわかるということはなぜ起きるのであろう。説明は二つある。

一つは、本の送り手(書き手も編集者も装幀家も書店員も含めて)がその本に敬意と愛情を込めている本には固有の「オーラ」がある、ということである。長年使い込んだ道具に「手沢」がつくように、送り手たちの「思い」のこもった本には独特の「つや」が出る。私たちは書店を遊弋しているときに、その「つや」に反応する。作家が書き飛ばし、出版社もやつつけ仕事で送り出し、書店員もなげやりに配架したような本には、その「つや」がない。それは、物質的にわかる。

もう一つは「こじつけ」である。「なんとなく」手に取った本のどうでもよいような一行が「自分の人生を決定づける宿命の一行」であったというのは、実は本を読んだあとに思いついた「あとちえ」である。どんな本でも、真剣に読めばものの考え方や感じ方が多少は変わる。一読して変わったあとの自分を「より本来的な自分」であると思えば(人間は必ずそう思い込む)、その本との出会いはおのれの進むべき道を指し示す、宿命との出会いだったということになる。

Y。ただし、「宿命と出会う」ためには、そこに偶然がなければならぬ。

どの本を手にとってよかつたのだが、他ならぬその本を「たまたま」手に取ってしまったという偶有性が保証されていなければ、「宿命」という言葉は出てこない。そのためには「事前にその本については、いかなる予断も持っていなかった」という自己申

告が不可欠である。書評で絶賛されていたり、友だちに熱心に勧められたり、夏休みの課題図書であったりした本は、どれほど面白く読んでも、それを「宿命の出会い」だと言い募ることはできない。そこには人為が介在しているからだ。

「宿命の本」との出会いのためには、「独特のオーラに反応して、引き寄せられるように手に取った」という「物語」がどうしても必要である。そして、それは紙の本でしかなしえない。「いつかこの本が私にとって死活的に重要なものとなるかもしれない」という種類の先駆的直感^{*}は電子書籍については起動しないからである。電子書籍の最大のメリットは、いつでもオン・デマンドで、タイムラグなしにアクセスできるということのだが、まさにそのメリットゆえに私たちは電子書籍の選書において先駆的直感^{*}を必要としない。電子書籍はスーパーリアルに「今読みたい本、読む必要がある本」を私たちに届けてくれる。その代償として、電子書籍はその本との宿命的な出会いという「物語」への共犯的参加を読者に求めない。電子書籍は Z である。欲望も宿命も自己同一性も、そのようなロマネスクなものに電子書籍は用事がない。けれども、読者はしばしばそちらの方に用があるのである。

口承が中心であった時代から、書きものに媒体が移ったとき、私たちの脳内で活発に機能していた「長い物語を暗誦する能力」は不要になった。それと同じように紙の本から電子書籍に媒体が移るとき、書物と出会い、書物を読み進むために、私たちが必要としていた機能の「何か」が失われる。私にはそれは失ってはならないもののように思われる。紙の本はなくなると私は思っているが、それはコストやアクセシビリティや携帯利便性とはまったく無関係な次元の、人間の本然的な生きる力の死活にかかわっている。

注

(内田樹「活字中毒患者は電子書籍で本を読むか？」による)

*ガジェット……ちよつとした気の利いた小道具

*デバイス……コンピュータの特定の機能を果たす周辺装置

*オン・デマンド……顧客の個別の要求に対応したサービスのこと

*アクセシビリティ……入手しやすさ

問一

空欄

a

く

c

に当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマ

クせよ。解答番号は

1。

A a いわゆる

b そもそも

c まるで

B a まるで

b いわゆる

c そもそも

C a そもそも

b いわゆる

c まるで

D a いわゆる

b まるで

c そもそも

問二 傍線1「その消息は音楽を聴く場合と変わらない」とあるが、それはなぜか。理由として最も適切なものを次の中から一つ

選び、その符号をマークせよ。解答番号は

2。

A 結末や犯人を予想しながら読む推理小説は、フィナーレを予期しながら聴く交響楽と芸術性において等価であるから。

B 全体を鳥瞰しその中における自分の位置を確認する能力が必要とされる点で、読書と音楽を聴くことは共通するから。

C 高い読解能力を有する読者は熟練した音楽の聴き手と同様に、作品から無限の快楽を引き出す方法を心得ているから。

D 人間が生きていく上で必要不可欠とされる能力の大半は、書籍を読むことと音楽を聴くことによって習得されるから。

問三 空欄

X

に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

3。

A 偶然的な

B 先験的な

C 死活的な

D 力動的な

問四 傍線2「電子書籍ではそれが無い」とあるが、それはどういうことか。説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 4。

- A 電子書籍では、「読み終えた私」は仮想的存在であり、パーティの招待状が郵送されることは非現実的だということ。
- B 電子書籍読書によってもたらされる愉悅は、読者の自己満足の上に成り立つ明らかな虚構だということ。
- C 電子書籍を読む場合、「マッピング」の能力が発揮されないまま、読書が終わってしまうということ。
- D 電子書籍は身体実感を疎外するため、読者が物語の「ほんとうの意味」を理解することは不可能に近いということ。

問五 空欄 Y に入る文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 5。

- A 「こじつけ」なのだが、それでよいのである
- B 「宿命との出会い」など滅多に起こらない
- C 「なんとなく」は、「必然」の言い換えなのである
- D 「あとちえ」だと自分で気づいていけば問題はない

問六 空欄 Z に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

6。

- A 実供給対応の必要入力源
- B 実社会対応の直感入力源
- C 実経験対応の宿命入力源
- D 実需要対応の情報入力源

問七 傍線3「紙の本から電子書籍に媒体が移るとき、書物と出会い、書物を読み進むために、私たちが必要としていた機能の

『何か』が失われる」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は7。

A 電子書籍では人間が書物と宿命的な出会いをしたという物語が生まれにくく、また生きていくうえで絶対に必要な地図上に自分の位置を記す能力も育てることができないということ。

B 電子書籍では固有のオーラがないために出会いの「あとちえ」を得る機会が生まれにくく、また「読みつつある私」と「読み終えた私」との真贋判定能力を育てることができないということ。

C 電子書籍ではタイムラグなしにアクセスできるために暗誦する能力が育ちにくく、また「自己意識」や「超越論的主観性」という認識を育てることができないということ。

D 電子書籍では口承文芸のような耳からの出会いが生まれにくく、また「どこを読んでいるかわからない」ことが多いのでマッピングの能力を育てることができないということ。

問八 次の中から本文の内容として最もふさわしいものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は8。

A たしかに紙の本はなくならないであろうと思われるが、しかし電子書籍はコスト面や携帯利便性などで優れており、今後は若者を中心にもっと普及していくだろう。

B 紙の本の場合、題名も作者も内容も知らないのに何となく惹きつけられ手にとってしまうことがあるが、電子書籍ではそのような宿命的な出会いは起こりにくい。

C 電子書籍は紙の本を読んでいるのと同じように頁がたわんだり、反対側の活字が透けて見えるような様々な工夫がされておき、今後は全行程を上空から俯瞰するような機能ができれば紙の本をしのぐであろう。

D 電子書籍は読みたい本をすぐに読めるといふメリットがあり、持ち運びも便利だが、しかし人間の最も大切な生きる力を育てるような機能がないのでこれからの社会ではあまり普及しないだろう。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

しばらく前の話だが、高校時代の級友で、ある保険会社の幹部になっている人物と対談する機会があった。

仕事関係のものは別として、自分はいま本を読まない(読む暇がないといったニュアンスであった)。読みたい本はいろいろあるが、それは、先の楽しみにすべてとつてある。会社を辞めたら思い切り読むつもりだから、あんたの小説もその時読ませてもらうよ——。笑いな¹ながら彼のそう語つたのが忘れられない。

それからもう五、六年も経つたらうから、役員だった彼も現役を離れて、そろそろ読書^{ざんま}三昧の日々を送っている頃だろうか、と想像することがある。

いや、あれは業務多忙の時期に抱いた夢に過ぎず、いざその季節が訪れてみればまた別の趣味に走って、やはり本は積まれたままなのではあるまいか、と意地悪く考え直したりもする。

その後会っていないので、実際はどうであるのかわからない。ただ、当時の彼が読書というものに郷愁にも似た思いを抱いていた、という印象だけは打ち消し難い。

また、長年勤めた企業を最近辞めた大学時代の友人に、通勤することがなくなって、生活はどんなふうに変つたか、と訊ねたことがある。

新聞をよく読むようになったな、というのが答えだった。以前は必要な記事だけに急いで目を通していたのだが、今は長い時間をかけてじっくり読むようになった。新聞ばかり読んでいても、仕方がないんだがね、と彼は苦笑をつけ加えた。

郷愁の遙かな対象とされるにせよ、刻々の出来事を伝える新聞の陰に押しやられるにせよ、読書の影の薄い毎日をわれわれが過していることだけは間違いないように思われる。これは我が初老男性層に限られた現象ではないだろう。

たしかに、電車に乗ると本を開いている比較的若い乗客を見かけることはある。何を^ぞ読んでいるのか、と覗いてみると、種々の資格を取るための問題集であったり、外国語会話のテキストだったり、何かの解説書であったりして、実用書が多い。文庫本

の場合も、読み終ったら捨ててしまっても惜しくないような興味本位のお話を、車体の動^①ヨウにのせてただ読み飛ばしているだけの光景に見える。

それらの読書を否定することはもちろん出来ない。実用書は役に立つのだし、娯楽のための本も当然なければならない。

そしてふと気づくのは、そういった車内の読書傾向と、最近の書店の雰囲気とが見事に照応している点である。とりわけ郊外地に新設された本屋に足を入れたりすると、これが書店であるか、と明るい照明の下に並ぶ棚を眺めて a ことがある。日用雑貨や包装食品を揃^{そろ}えたスーパーマーケットに近い空気が漂っている。消費者のニーズとやらに合わせた店舗の在り方なのであろう。

しかし他方に、それとは別種のもう一つの読書があることも忘れられてはなるまい。実用の役には立たず、娯楽を前にしてはいささかしかつめらしい、野^やボ^ぼな読書というものが――。

まだ四十代²の頃だっだろうか、何かの折にある友人に、君は今の暮しの中に不安を感じることはないか、と訊ねた憶えがある。住む家を持ち、健^③やかな妻子に囲まれた堅実な勤め人である彼は、別に不安はないよ、と訝^{いぶか}しげにこちらの顔を見返した。不安とは、個人が感じて初めて発生するものだから、彼がないといえは不安はなかったのだろう。

しかしその時、 b 、と疑った。妻は夫を捨てて去るかもしれない、子供は事故や病気でいつ死なぬとも限らない。それを自明の前提とした上で成り立っているのが家庭である以上、不安がない、などということはあり得ぬと思った。

不安のない世界もあるのかもしれない。としたら、たとえば実用書や娯楽書の読書はその世界に属する。

けれど生きていること自体の不安をいささかでも意識した場合、その不安を共有し得る別種の読書が求められるのではあるまいか。

不安という言葉がもし狭過ぎるなら、今あることへの疑い、と言ひ替えてもよい。どこかにある、こことは異質の何かに向けての模索と呼んでもいい。少なくとも、今書かれている様々の文学作品のうちには、現代を生きる人々の内部にひそむ疑いや模索の聲が、何かの形で響いているように思われる。声はくぐもって聞き取りにくいかもしれない。歌は割れて音程を外している

こともあるだろう。

けれど、未完の試行サク誤のうちには果せぬ探索というものがある。むしろそれこそが創造という営為の宿命でもある。

としたら、この種の読書もまた、模索を避けられまい。書き手がいて、その人の生み出した優れた作品を読者は受け身で読むだけではない。読むことによつて、自らの不安や疑いや希求を発条にして、ア自身にもまだ見えぬものを先に発見する

ようなイがいなければ、ウも容易に前へは進めないだろう。そのエは、必ずしも数を頼りにするもの

ではあるまい。読むことの熱が、書くことの熱と共鳴する読者であればよい。

おそらく、真の読者は永遠に、自分のためのただ一冊の本を求めて読み続ける。それは真の書き手が、まだ書き得ぬ作品に向けてひたすら書き続けるのと少しも変らぬ、きわめて人間的な営みであるに違いない。

(黒井千次の文章による)

問一 傍線①②④のカタカナの漢字と同じ漢字を含むものを、また③の読み方として正しいものを、それぞれの群から一つ選

び、その符号をマークせよ。解答番号は①が 9、②が 10、③が 11、④が 12。

① 動ヨウ A 歌ヨウ曲 B 資本主義のヨウ籃期

C ヨウ姿端麗 D 幼帝をヨウ立する

② 野ボ A 朝三ボ四 B 懸賞論文に応ボする

C ボ情を抱く D 規ボの大きい会社

③ 健やか A おおだ B なご

C たお D すこ

④ サク誤 A 寡サクな作家 B 作文を添サクする

C 情報がサク綜する D 無為無サク

問二 傍線1「彼のそう語ったのが忘れられない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **13**。

A 澁刺としたその笑顔から彼が高校時代と同じように読書に対する情熱を、いまもなお持ち続けていることが感じられたから。

B 定年を迎えて時間に余裕ができたとしても小説など読むつもりなどないにもかかわらず、その場を取り繕うような狡猾な態度が垣間見えたから。

C 会社の幹部として多忙な日々を送る彼にとって、読書はもはや懐かしむべき過去の行為と化してしまっているように感じられたから。

D いまは読書に費やす暇がないほど仕事に追われる毎日だが先の楽しみとしてとってある、という言葉から読書への耽溺生活という彼の夢に驚いたから。

問三

空欄

a

に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

14。

A 目の色を変える

B 涙を呑む

C 溜息の出る

D 腹に据えかねる

問四

傍線2「四十」とあるが、これと最も関係の深いものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

15。

A 不惑

B 知命

C 而立

D 志学

問五 空欄 b に当てはまる文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

16

- A 不安を口にした途端、その不安が現実のものとなることを恐れているだけではないのか
- B 働き盛りの多くの社会人は、実は日々不安のない世界に暮らしているだけではないのか
- C 不安があるにもかかわらず、他人には見えぬようすべてを隠しているだけではないのか
- D 不安がないのではなくて、自分の奥にまだ隠れている不安が見えないだけではないのか

問六 空欄 ア イ エ に当てはまる語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマ

ークせよ。解答番号は 17。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | ア | 書き手 | イ | 読者 | ウ | 書き手 | エ | 読者 |
| B | ア | 読者 | イ | 書き手 | ウ | 読者 | エ | 書き手 |
| C | ア | 書き手 | イ | 読者 | ウ | 読者 | エ | 書き手 |
| D | ア | 読者 | イ | 書き手 | ウ | 書き手 | エ | 読者 |

問七 傍線3「きわめて人間的な営みであるに違いない」と言える理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号を

マークせよ。解答番号は 18。

- A 多忙な時には必要性を感じないが、アクシデントに出会った時に頼りになるのが読書だから。
- B 現代を生きることは不安なことゆえ、生き方への本質的な問いを伴うのが本当の読書だから。
- C 本を読み書きすることは、書き手にとっても読者にとっても先の見えない不安な行為だから。
- D 現代のような不安の大きな時代を生き抜くためには、読書することがどうしても必要だから。

問八 本文の表題として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 19。

A 読書の快楽

B 郷愁の読書

C 読書の効用

D 様々な読書

(三) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、文章は二つの話題から構成されている。

ある所にて、この世の連歌の上手と聞こゆる人々、寄り合ひて連歌しけるに、その門の下に、法師の、まことに
頭はをつかみに生ひて、紙衣かみぎのほろほるとある、うち着たるが、つくづくこの連歌を聞きてありければ、「何ほどの事を聞く
らん」と、ア と思ひて侍るに、この法師、やや久しくありて、うちへ入りて、縁のきはに居たり。人々、イ と
思ひてあるに、はるかにありて、「賦物ふしものは何にて候ふやらん」と問ひければ、その中に、ちとくわうりやうなるものにてありける
やらん、あまりに ウ く、あなづらはしきままに、何となく、

「括りもとかず足もぬらさず

と言ふぞ」と言ひたりければ、この法師、うち聞きて、二三反ばかり詠じて、「おもしろく候ふ物かな」と言ひければ、いとど
エ と思ふに、「さらば、おそれながら、付け候はん」とて、

名にしおふ花の白川わたるには

と言ひたりければ、言ひ出だしたりける人をはじめて、手¹を打ちてあさみけり。さて、この僧は、「いとま申して」とてぞ走り出
でける。

後に、この事、京極中納言聞き給ひて、「いかなる者にかと、返す返すゆかしくこそ。いかさまにてもただ者にてはよもあら
じ。当世は、これほどの句など付くる人はいがたし。あはれ、歌よみの名人たちは、ぞくかうかきたりけるものかな。世の中²
のやうにおそろしき物あらじ。よきもあしきも、人をあなどる事あるまじき事」とぞ言はれける。

* 伏見中納言といひける人のもとへ、西行法師、行きてたづねけるに、あるじはありきたがひたるほどに、侍の出でて、「何事
いふ法師ぞ」と言ふに、縁に尻かけて居たるを、「けしかる法師の、かくしれがましきよ」と思ひたるけしきにて、侍どもにらみ
おこせたるに、簾の内に、箏の琴にて秋風楽しゅうふうがくをひきすましたるを聞きて、西行、この侍に、「物申さん」と言ひければ、「憎し」
とは思ひながら、立ち寄りて、「何事ぞ」と言ふに、「簾の内へ申させ給へ」とて、

ことに身にしむ秋の風かな

と言ひでたりければ、「憎き法師の言ひ事かな」とて、^{*}かまちを張りてけり。西行、はふはふ帰りてけり。

後に、中納言の帰りたるに、「かかるしれ者こそ候ひ **X**。張り伏せ候ひぬ」とかしこ顔に語りければ、「西行にこそありつ **Y**。ふしぎの事なり」とて、心うがられけり。

この侍をば、やがて追ひ出だしてけり。

注

『今物語』による

*をつかみに生ひて……つかめる程に髪が伸びた様子。

*賦物……連歌で、句の中に物の名を詠み込むときの規制。

*くわうりやうなるもの……ぶしつけな者。

*京極中納言……藤原定家(一一六二～一二四二)。歌人・歌学者として著名。

*ぞくかうかきたりける……「恥をかいた」というほどの意味。

*伏見中納言……源師仲(一一一五～一一七二)のこと。

*かまち……上下のあごの骨のこと。ここで西行は、頬骨のあたりを平手で張られたのである。

問一 空欄 **a** に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **20**。

- A やむごとなく B やむごとなき C あやしげなり D あやしげなる

問二 空欄 **ア** **イ** **エ** に共通して入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解

答番号は **21**。

- A ゆかし B をかし C おとなし D かしかまし

問三 傍線1「手を打ちてあさみけり」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

22。

- A 拍手しながら歓迎したのであった
- B 手をたたきながらつまはじきにしたのであった
- C 手で僧をたたいてあざけたのであった
- D 手を打って驚嘆したのであった

問四 傍線2「世の中のやうにおそろしき物あらじ」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせ

よ。解答番号は 23。

- A 世の中ほどおそろしいものはないだろう
- B 歌人の仲ほどおそろしいものはないだろう
- C 男女の仲ほどおそろしいものはないだろう
- D 名譽欲ほどおそろしいものはないだろう

問五 傍線3「あるじはありきたがひたるほどに」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

解答番号は 24。

- A 侍の主人が行き違いで西行のもとに出かけたところだったので
- B 西行の仕える主人がちょうどこに出かけてきていたので
- C 来客と応対するべき上司が足を怪我しているときだったので
- D 伏見中納言は外出して行って行き違いになってしまったので

問六 傍線4「侍どもにらみおこせたるに」とあるが、そのようにした理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符
号をマークせよ。解答番号は 25。

- A 正体のわからぬ僧が主のいない屋敷を選んで訪れてきたと考えたから。
- B 正体のわからぬ僧がなぜこのように馴れ馴れしく振る舞うのかわからないから。
- C 得体の知れない僧が素姓も明かさず、邸内で傍若無人にふるまっているから。
- D 得体の知れない僧が邸内から聞こえてくる箏の琴の音に耳を澄ましはじめたから。

問七 傍線5「何事ぞ」とあるが、これは誰の発言か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番

号は 26。

- A 侍
- B 西行
- C 伏見中納言
- D 伏見中納言の北の方

問八 空欄 X・Y に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせ

よ。解答番号は 27。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| A | X | つる | Y | らむ |
| B | X | つれ | Y | らめ |
| C | X | けむ | Y | べし |
| D | X | けめ | Y | べき |

問九 本文の内容についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 28。

- A 前半に登場する「法師」は自らが句を詠んだことが恥ずかしくなって、その場から姿を消した。
- B 西行は、伏見中納言の北の方の演奏に心惹かれ、中納言の留守中に邸宅を訪れたと考えられる。
- C この文章は、ある人物の能力を外見にはかわからずに判断することの重要性を説いている。
- D 京極中納言と伏見中納言は、いずれも風雅の才をあらゆる事柄よりも優先させる人物として描かれている。

問十 西行が詠んだ和歌を次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 29。

- A 春すぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山
- B 願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ
- C 田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
- D 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

